

## 110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

### 「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(16)

#### 講題：水戸徳川家の文教事業—東アジア文明の発展を中心に

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 16 回は、徳川ミュージアムの徳川眞木館長による「水戸徳川家の文教事業—東アジア文明の発展を中心に」である。今回もオンラインで行われた。

最初に、今日のコロナ禍で館長ならびに博物館が何を行なっているかについて話された。この二年間は水戸徳川家に伝わる森林の管理・整理事業に取り組んでいるという。今日世界中で森林が見直されているが、それは森林伐採により地球環境が影響を受けているからである。徳川家康の孫光圀は「森を家来に褒美としてあたえてはならない」と遺訓した。家来が金のために木を伐採し、地域の環境、子孫に影響をあたえることを危惧したからで、不法な森林伐採による今日の地球温暖化の問題を予見していたかのようなのである。先祖から子供へ、子供から孫へ世の中の大切なルールや忘れてはならない事実を伝えていくこと、すなわち家単位の継承というのは日本や台湾などアジアの特徴であろう。

館長はまず日光東照宮の写真を見せてくれた。東照宮は家康を祀るが、偉人を神格化する宗教が日本にはあった。それから徳川家系譜表を見せて、その系譜を紹介した。徳川御三家とは尾張、紀州、水戸を言い、それぞれ家康の三人の息子が継承し、戦争によらずに地域を治めた。世の中を武力ではなく、技術と知識によって治めるため、家康は息子たちに学問を学ばせた。また家康は林羅山と出会い、儒教を取り入れ、古典籍の収集と保護に尽くした。儒教を重用した点は東アジアとの共通点だろう。

館長はミュージアムの写真を見せながら、それについても説明した。博物館は水戸 13 代圀順が設立した公益財団法人で、「彰往考来」（過ぎたるを彰らかにし、未来を考える）を基本理念に掲げる。この理念は光圀が『春秋左氏伝』の一節から命名した彰考館に由来する。

水戸徳川家初代頼房は林羅山ら儒学者と交流しただけでなく、神道も研究した。そして新しい人材を日本各地から集めた。

頼房の三男光圀は領民のための政治を心がけ、名君の誉れ高い人物である。出版事業にも取り組んだ。最もよく知られるのは 249 年かけ、全 397 巻からな

る『大日本史』の編纂事業である。この歴史書は地方に分散した古文書、歴史資料を集め、多くの学者による検討、校訂を繰り返して完成された。それ以外にも、館長は光圀関わった『礼儀類典』—零元天皇の勅命を受けて編纂した、朝廷の儀礼や行事に関する書—と、『救民妙薬』—民のために病気やけがの処方処置をまとめた書—を紹介した。後者を光圀は木版で刷り、領民に配ったと言われる。

水戸学は水戸徳川家で形成された学問・思想体系で、儒学、神道、国学などを組み込んだ幅広い内容を持つ。館長は次の三期に分けて、それぞれ簡便に説明した。前期水戸学—光圀の『大日本史』編纂を契機に成立し、儒学者の佐々木宗淳、安積澹泊らが中心となる。中期水戸学—18世紀ごろ、荻生徂徠の学問を取り込み隆盛した。後期水戸学—19世紀に入り、異国船の脅威に直面して、その危機感から国政と絡めて論じられた。国体の問題が浮上し、国際的視野に立って、日本はどうあるべきかが考えられた。中心人物に藤田東湖らがいる。

水戸学の特徴に書物の編纂・出版事業があるが、その事業を通して、身分を問わず、有能な学者、人物が集められた。すなわち水戸学は人が構成した学問だ、と館長は述べる。

館長は「梅里先生碑」、西山御殿、御前田、水戸徳川家墓所の地図、朱舜水の墓の写真なども見せて、説明してくれた。

最後に館長は次のことを述べられた。今世界は大きく変化している。新たな考え、意見が登場しており、従来の考えが通用するとは限らない。しかし、変えるべきことと変えてはいけないことを意識することが大切である。例えば、森の管理は残すべきものを残すことである。同時に、新しいものを取り入れていかなければならない。こうしたことが水戸の歴史から学ぶことができる。人材の育成、教育の重視、これらを惜しんではならない。アジアは家族を大切にし、先祖から子孫へ継承する精神、歴史遺産がある。台湾にもその精神はある。それゆえ台湾の人には未来を作る技術、知識を学んでほしい。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿: 塚本善也・日文系副教授)